

横浜市立原中学校 学校評価報告書 平成29年度

重点取組分野	平成29年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①授業の始めに、単元等の「目標は明確に」することで、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る。②授業の中で、できるだけ「説明は短く」し、生徒の主体的な学習活動を充実させ、思考力・判断力・表現力育成に繋げる。③家庭学習の定着・自主学習の習慣化を図るため、自主学習ノートやネット配信教材を効果的に活用する。	①②学習指導要領改訂の趣旨に則り、授業の工夫・改善に向け、教員間での校内授業参観週間を設けた。意識化は図れたが、具体は次年度に繋げていく。③ネット配信教材は教員・生徒ともに活用が広がってきた。ただ、自主学習の習慣化をもっと多くの生徒に浸透させる必要がある。	B
豊かな心	①学校や地域での様々な場面を通して、気持ちの良い挨拶ができ、凡事をおろそかにせず、礼儀を大切に生徒の育成を図る。②特別な教科「道徳」の授業、人権教育の充実を図り、互いの良さや違いを認め合い、相手を思いやる心を育てる。③①、②をふまえ、生徒自らが課題意識をもち、考えて行動する取組を進める。	①挨拶、凡事徹底は大部分の生徒ができている。生徒自らが規範意識や礼儀の大切さを理解し、教員の指導・指示がなくても取り組めるような気運をさらに高めていく。②③道徳の授業と各教科、特別活動、総合的な学習との関連をより意識した取組を進めている。日常の学校生活での成果と課題を確認し、改善に繋げていく。	B
健やかな体	①健康診断、体力テストの結果から、自分の健康状態を把握し、主体的に健康管理できるよう指導の工夫改善に努める。②学校医、区役所等と連携し、食育講演会を各学年ごとにテーマを決めて実施し、食教育の充実を図る。③生徒保健委員会を中心に、ケガの予防、発達段階に応じた栄養の摂り方について学習を深め、全校生徒に啓発する。	①事前に資料を配布し健康診断についての理解が深まるよう努めたが、受診率は低く、課題が残る。②3年生を対象に区内小学校の栄養教諭を講師に招き食育講演会を行った。発達段階に応じた食育を続けていきたい。③学校保健委員会では受診率に課題のある「歯」「目」に焦点を当て、外部講師を招き学習し啓発活動を行った。	B
教育課程学習指導	①各教科の授業時数を確保しながら、生徒会活動や教育相談、部活動の時間を保障できるよう、短期、長期スパンでカリキュラム・マネジメントに取り組む。②単元や内容のまとまりごとに学習状況を適確に把握し、妥当な学習評価の研究に取り組む。③課題解決型学習の研究を進め、生徒の思考力・判断力・表現力を育てる単元づくりに取り組む。	①時程を一定に揃えたので、安定した生活のリズムが生まれた。必修授業時間数も35週をクリアしつつ、道徳科の先行実施や次年度以降のカリマネにも着手し、基盤づくりができた。②③学習指導要領の改訂を見据え、単元や内容のまとまりごとの学習評価、課題解決型の学習指導の研究に取り組んでいく。	A
児童生徒指導	①生徒指導に関する迅速な情報の共有化、組織的な指導、小中一貫した取組をさらに浸透させる。②学校生活の様々な場面で基本的な生活習慣の定着と規範意識の向上を図る。③生徒の抱える悩みや心的ストレスを感じとり、問題解決に向けて適切な支援ができるよう、教育相談の質を高める。⇒いじめの早期発見・未然防止に向けた職員研修の充実。	①生徒の実態把握、個々の案件についての情報も共有化は、生徒指導連絡会、ブロック専任会を定期的に行うことを通じて、概ね浸透してきた。②学校生活の様々な場面で指導継続し、今のところ成果が表れている。③生徒の言動の変化を敏感に察知し、心に寄り添う指導を通して、いじめの早期発見・未然防止に繋げている。	A
地域連携	①授業公開、学校だより、学年通信や学級通信を通して、学校の様子や教育活動の方針等をタイムリーで質の高い内容の発信を目指す。②学校HPの「原中の日々」のページを充実させ、タイムリーで質の高い内容の発信を適時更新する。③学家地連の事業を活用して、生徒の地域ボランティアへの参加体制を強化し、地域とのつながりを深める。	①学校だよりは定期的に発行することができた。②学校HPの更新は、更新が滞ってしまうことがあった。担当者を増員するなど改善策を検討している。③学家地連の事業を通じて、地域と学校の円滑な連携を進めている。とくに、中学生ボランティアの参加要請に可能な範囲で応えられるよう地域コーディネーターの活用も進めている。	A
特別支援教育	①個々の状況に応じて、学校生活に必要な情報を確実に伝える方法、授業のユニバーサルデザイン化を研究する。②それぞれのニーズに応じた学習支援の充実を図る。⇒ネット配信教材の効果的な活用③「障害者差別解消法」に基づく、「合理的な配慮」等の支援体制の整備、適確な特性理解と合意形成について、教職員の理解を深めていく。	特別支援教室の運営や個別の学習支援(取り出し授業)については、教員の理解が深まり、円滑に進められている。①②授業のユニバーサルデザイン化、個に応じた学習支援の充実を図るために、市教委から発信される他校での効果的な実践例等を参考にして、本校の実態に応じた具体的な方法を探っていく。	B
いじめへの対応	①いじめの早期対応にあたり、組織的な生徒指導・相談活動を通して、生徒の内面に迫る指導の質を向上させる。②授業、学校行事、部活動、地域ボランティア等の場面を活用して、自尊感情、相手意識を育て、適切な人間関係を確立する。③家庭・地域や関係機関との連携を強化し、信頼関係を基盤とした指導を組織的に行う。	①②いじめ防止対策委員会を最低月1回開催し、情報の共有化から組織対応に繋げている。教職員個々の生徒の言動の変化を敏感に察知するから、カウンセリングスキルの向上に向け、専任を中心としたOJTを進めている。③小中一貫したいじめ防止対策をブロック専任会を起点に強化している。	B
人材育成・組織運営	①今年度OJT研究協力校として、適宜、市教委等の支援を受けながら、課題別・経験別のOJTをさらに充実させる。②学校運営組織の一員であることを自覚し、積極的に学校運営に参画できるよう、校務分掌の理解を深め、役割と責任を明確にする。③業務が個業化・分業化しすぎないように、進捗状況などを相互に確認し合える機会を設定する。	①研修を2回行い、学校として実現したい教職員の姿を明らかにした。②その中で行事をはじめ、様々な教育活動が組織的に運営されるよう意識して取り組んできている。③時期によって業務が重なって仕事が集中してしまう教職員が出ないように、組織の改編等さらなる工夫が必要である。働き方改革にも関連付けていく。	B
ブロック内相互評価後の気付き	登下校時に挨拶をしていく小学生の数も増え、前年度よりもさらに小中の一体感を感じている。「9年間かけて育てる子ども像」を、今後も継続し小中一貫教育の基盤としていくことを確認した。また、本年度は合同授業研究会の持ち方について、時期や回数などの見直しを行い、次年度は、中学校は例年より早めの実施を計画し、新たな単元での授業公開・協議会をもつこととした。今後、小中ブロックでの繋がりをより一層高めていくために、推進担当者間の協議機会を増やし、学習・生活・特別支援の面…と、分野・すそ野をを広げていくことが必要である。		
学校関係者評価	本年度の生徒・保護者評価と教職員の自己評価の集約をもとに成果と課題を報告した。座長から「学校は地域の要である。今の原中学校は生徒のボランティア活動が充実しており、その役割を十分に果たしている。」とお褒めの言葉をいただいた。また、学区内小学校からは「小中のつながりを大切に教職員交流や、児童生徒交流がしっかりできている。」との話も出た。保護者の学校への理解度が低い部分(特にキャリア教育)に関しては、「積極的にアピールしないと内容がしっかり伝わっていない。」とのご指摘もあった。貴重なご意見を今後の教育活動に生かしていきたい。		
学校経営中期取組目標振り返り	今年度も、「生徒が実感できる学力向上」、「主体的な生徒活動の充実」の2本柱を重点に置き、重点取組分野それぞれで具体的な取組を進めている。課題も明確になり、学校運営への参画意識も高まるであろうと考えたが、職員にとって、この2本柱と関連付けて取り組むことは、なかなか難しかったようである。さらに、「働き方改革」を意識した業務の効率化やICT化を進めていく中で、本校のスケールメリットを生かしながら、業務の個業化・分業化の弊害が出ないように、組織的な取組を進めていくが、職員相互に信頼関係が構築されていることが大前提である。		